

「ギンリョウソウ (2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

ギンリョウソウは「腐生植物」の一種である。葉緑体を全く持たないので、自分では光合成ができない。正確には、「樹木の根と共生する菌類」から栄養を得ているので「寄生植物」に近い。もともと土から養分を摂取する能力はなく、どこまでも「他者頼り」の植物である。



ギンリョウソウは、花の内部に少し青い色素がある以外は全身真っ白で、非常に美しい。頭をもたげた真っ白な姿が幽霊を連想させるので、「幽霊草」とか「幽霊茸」という呼び名もある。

一本掘り起こしてみると、地上に出ている部分より



も、地中の部分のほうが茎が長かった。根まで掘るのは難しかった。一年の大部分の時期を、地中で「地下茎」ので過ごし、花を咲かせる時だけ茎(花茎)を伸ばして地上に姿を現すという、キノコのような生活を送っているのだ。



地上に顔を出す時は、こんな姿である。とても花を咲かせる植物には見えず、キノコかシダ植物のようだ。しかも顔を出した部分は「芽」ではなく、いきなり「花穂」ということになる。どこまでも変わっている。



送粉はハチ(マルハナバチなど)が行っているようだ。じっと観察すれば、虫が送粉しているところを観察できるのだろうが、私は見る事ができなかった。



花は意外にも長期間咲いている。先始めから3週間ほど経つと、花の根元がふくらんで、徐々に結果してくる。熟すと果液も有するようになり、「モリチャバネゴキブリ」という昆虫が食べて、種子を拡散するという。最後まで「他者任せ」の植物である。